

I・HEAP (Historical Justice and History Education)

1章 イントロダクション：歴史的正義と歴史教育の接続

担当：池尻良平（東京大学大学院情報学環）

ikejiri@iii.u-tokyo.ac.jp

著者（後半パートのため省略）

■悩んだ訳語、定義について全体で共有した方が良かったこと、読み取れなかった原文

- ・ Historical Justice | 歴史的正義 ・ Public History | パブリックヒストリー
- ・ Narrative | ナラティブ（物語）
- ・ the Truth and Reconciliation Commission | 真実和解委員会

■議題

- ①各自が興味のあるテーマや章は何かの共有
- ②担当する章の調整

※可読性を上げるため、本文中には書かれていませんが章タイトルを挿入しています。

■本書の構成（pp.11-16）

●パート1：国家が推進するプロセスと教育

- ・国家が推進するプロセスと教育の関連性に焦点を当てたパート（※イントロが1章扱い）

2章：Malin Arvidsson, Henrik Åström Elmersjö | 歴史的不正義の教育への再文脈化:スウェーデンの歴史におけるロマ（※少数民族の名前）虐待に関する白書と教科書の関係性

Recontextualizing Historical Injustice into Education: The Relationship Between a White Paper and a Textbook on the Abuse of the Roma in Swedish History

→公的な知識（official knowledge）と再文脈化（recontextualization）の概念を組み合わせることで、知識が教育化される過程に光を当てている。

3章：Sirrka Ahonen | 過去の責任と：南アフリカの経験から描かれた理論的・教育的考察
Taking Responsibility for the Past: Theoretical and Educational Considerations, Illustrated by South African Experience

→南アフリカの真実和解委員会と、南アフリカの歴史教育に対するこの委員会の活動の倫理的な示唆について述べている

4章：Julia Paulson, Michelle J. Bellino | 教育と真実委員会(?): 歴史的正義に向けたパターン、可能性、示唆

Education and Truth Commissions: Patterns, Possibilities and Implications for Historical

Justice

→20 の真実委員会を分析し、時間経過とともに教育への従事を強めているように見えることや、一方で元々教育的な意図があったわけではなかったことを述べている。

●**パート 2：歴史的正義とパブリックヒストリーの空間**

・パブリックヒストリーの文脈における歴史的正義の観点を幅広く扱っているパート。

5章：Erik Ropers | 花岡事件と日本北部の地域史と記憶形成の実践

The Hanaoka Incident and Practices of Local History and Memory Making in Northern Japan

→学校や地元の組織、地元の教育者たちが、第二次世界大戦中の中国人強制労働者の反乱を鎮圧した「花岡事件」を、どのように（異なって）理解しているかを調査している。

6章：Daniela Romero-Amaya | 紛争後の歴史のナラティブと市民的な主体化

Historical Narratives and Civic Subjectification in the Aftermath of Conflict

→紛争後の市民が、いかに特定の民主主義に向けて規範的に構成されるかを理論化し、歴史的不正義が異なる包括的なナラティブにどのように埋め込まれるかを論じている。

7章：Björn Norlin, Daniel Lindmark | 和解プロセスにおける歴史的知識の生成と一般: スウェーデン国教会とサーミ（※遊牧民の名前）の場合

Generating and Popularising Historical Knowledge in a Reconciliation Process: The Case of the Church of Sweden and the Sami

→歴史的問題が真実委員会や白書プロジェクトの中で定式化されたり、研究されたり、出版されたとき、歴史的知識に何が起こるのかを、スウェーデンの事例をもとに論じている。

8章：Nicola Gauld, Ian Grosvenor | 歴史と遺産における記念の役割: 第一次世界大戦従事者センターの遺産

The Role of Commemoration in History and Heritage: The Legacy of the World War One Engagement Centres

→第一次世界大戦の記憶に関する、コミュニティ組織と学者の共同プロジェクトについて考察している。特に、植民地主義や帝国主義の遺産に関する歴史的不正義や、障害者の権利に対する WW I の影響について論じている。

9章：Anna-Karin Eriksson | 慰安婦言説への挑戦: 歴史的正義と歴史教育の交差の再考

Challenging 'Comfort Women' Discourse: Rethinking Intersections of Historical Justice and History Education

→日本における慰安婦言説の整理を、ジェンダー上の正義か、勝者の物語・正義かという、不必要にも関わらず強制的な選択を作ってしまった、誤った二分法と捉え、研究している。

10章：Göran Collste | 倫理と歴史的正義

Ethics and Historical Justice

→倫理と歴史的正義の関係を論じ、歴史教育や歴史的意識の概念と結びつけている。

●パート3：教材：教科書、カリキュラム、政策

・教材、カリキュラム、政策の分野を扱っているパート

11章：Eleni Christodoulou | 教育的な贖罪としての教科書改訂？ 歴史的正義の手段としての歴史教育の可能性と課題

Textbook Revisions as Educational Atonement? Possibilities and Challenges of History Education as a Means to Historical Justice

→歴史教科書の改訂が歴史的正義の形態として実現するための4つの課題・原則を提示しつつ、キプロスを事例に、最低限の歴史的正義に対する歴史教科書の貢献を論じている。

12章：James Miles | 歴史的な誤りの矯正？ 入植者植民地主義の再現？ カナダにおける社会科カリキュラムの改革

Redressing Historical Wrongs or Replicating Settler Colonialism? Social Studies Curriculum Reform in Canada

→植民地主義に起因する不正義を出来事として扱うカリキュラムは、植民地の不正義を入植者植民地主義の構造から隔離しているということを論じ、問題提起している。

13章：Angela Bermudez | ナラティブの正義？ 暴力的な過去のナラティブを脱構築するための10のツール

Narrative Justice? Ten Tools to Deconstruct Narratives About Violent Pasts

→表題の10のツールと、生徒が暴力について批判的に理解するために教師ができる方法を解説している。歴史的思考や歴史意識を踏まえた、歴史教育の目標の正当性も論じている。

14章：Denise Bentrovato | 歴史教育、移行期の正義、和解の政治：南アフリカとルワンダの教科書における暴力的な過去をめぐる多面性と単一性

History Education, Transitional Justice and Politics of Reconciliation: Multi- and Univocality Around Violent Pasts in South African and Rwandan Textbooks

→ルワンダの教科書のナラティブが正義と説明責任に基づく移行期の正義プロセスの単一的なものであるのに対し、南アフリカの教科書のナラティブは、許しと交渉を中心とした移行期の正義のアプローチに基づく多面的なものになっていることを分析している。

●パート4：教育学、教師、生徒

・教育学を引用しつつ、教師と生徒の歴史的正義への期待や展望に焦点を当てたパート。

15章：Jonathan Anuik | カナダのブッククラブにおける和解の実践

Practicing Reconciliation in a Canadian Book Club

→ブッククラブにおいて植民地における先住民の闘争を扱ったフィクションの小説を扱うことで、教育実習生に対し、フィクションの物語が和解のための草の根的な実践に貢献できることを理解させられることを論じている。(歴史的エンパシーの獲得にも繋がった)

16章：Natasha Robinson | 社会的結合に向けた歴史意識の育成：南アフリカの生徒はどのように過去と現在の関係性の構築を学ぶのか？

Developing Historical Consciousness for Social Cohesion: How South African Students Learn to Construct the Relationship Between Past and Present

→現代社会における過去の遺産と意味を含め、若者が過去をどのように理解するかに焦点を当てた研究を紹介している。

17章：Andy Pearce, Stuart Foster | 歴史教育における歴史的正義とホロコースト

Historical Justice and the Holocaust in History Education

→若者にホロコーストを学ばせることは歴史における正義と不正義の複雑さを探求する機会になる一方、これだけでは寛容さは身につけさせられないと疑問を呈し、ホロコースト教育の実践のより深い見直しが必要であると論じている。

18章：Heather Mann | 教師は歴史的正義を気にしているか？イギリスにおけるホロコースト、ジェノサイド、植民地主義の授業

Do Teachers Care About Historical Justice? Teaching About the Holocaust, Genocide, and Colonialism in England

→教師へのインタビューをもとに、ホロコーストについて教えるときの動機や、授業計画の作成プロセスを調査している。

19章：Jan Löfström | 政治的な善意、道徳的教訓、歴史的正義？歴史の謝罪の動機と効果に関する高校生の考え

Political Good-Will, Moral Lessons, Historical Justice? Upper Secondary School Students on the Motives and Effects of Historical Apologies

→高校生が歴史の謝罪の動機と効果をどのように解釈しているのかを調査し、国家の戦略的利益の促進、道徳的教訓の伝達、世代をまたぐ被害の被害者に対する非物質的救済、という3つの異なる解釈があったことを発見している。

■結論 (pp.16-17)

- ・本書は、学校内外の歴史教育が、歴史的正義の理解と検討すべき課題に対して貢献していることを実証している。
- ・歴史教育の方法と概念は（それが志向的なものであれ、学問的な思考であれ）大規模な被害と不正義に繋がる長期的な原因や構造を文脈化するための重要な手段や機会になる。
- ・歴史教育が歴史的正義の重要な領域として注目される中、本書は重要かつ新しい方向性やアプローチを明らかにしており、将来の研究に向けた重要な課題も提起している。